

# 柿色の紙風船

海野十三

青空文庫



「おや、ここに寝ていた患者さんは？」

と林檎のよう<sup>りんご</sup>に血色<sup>けつしょく</sup>のいい看護婦が叫んだ。彼女の突つ立つ<sup>たつ</sup>て<sup>つ</sup>いる前には、一つの空ツボ<sup>ベッド</sup>の寝台があつた。

「ねえ、あんた。知らない？」

彼女は、手近<sup>てぢか</sup>に居た青<sup>あお</sup>ン<sup>ぶく</sup>腫<sup>ふく</sup>れの看護婦に訊いた。

「あーら、あたし知らないわよ」

といつて編物の手を停めると、グシヤグシヤにシーツの乱れて<sup>みだ</sup>いるその寝台の上を見た。

「あーら、本当だ。居ないわネ」

「ど、どこへ行つたんでしようネ」

「ご不淨へ行つたんじゃないこと」

「ああ、ご不淨へネ。そうかしら……でも変ね。この方、ご不淨へ行つちゃいけないことになつてんのよ」

「まあどうして？」

「どうしてといつてネ、この方、つまり……あれなのよ、痔<sup>じ</sup>が悪<sup>い</sup>いんでしょ。それでラジウムで灼<sup>や</sup>いているんですわ。判るでしょう。つまり肛門<sup>こうもん</sup>にラジウムを差し込んであるんだから、ご不淨へは行つちゃいけないのよ」

「治療中だからなのねエ」

「それもそりだけれどサ、もし用を足している間に、下に落ちてしまふと、あのラジウムは小さいから、どこへ行つたか解らなく

なる虞れがあるでしよう

「そうね。ラジウムて随分高価いんでしょ」

「ええ。婦長さんが云つてたわ。あの鉛筆の芯ほどの太さで僅か一センチほどの長さなのが、時価五六万円もするですつて。ああ大変、あれが無くなつちや大変だわ。あたし、ご不淨へ行つて探してみるわ。だけもし万一見付からなかつたら、あたし、どうしたらいいでしようネ」

「そんなことよか、早く行つて探していらつしやいよ」

「そうね。ああ、大変！」

林檎のように顔色の良かつた看護婦も、俄かに青森産のそれのように蒼味あおみを加えて、アタフタと室外へ出ていった。

だが彼女は、出ていったと思つたら、五分間と経たないうちに、もう引返して來た。引返して來たというより、むしろ飛び込んで來たという方が當つていた。その顔色と云えばまつたく血の氣もなく蒼褪あおざめて——。

「ああーら、どこにもあの人、居ないわ。あたし、どうしましょう。ああーツ」

彼女は、藻抜けもぬけの殻からの寝台の上に身を投げかけると、あたり憚ははからずオンオン泣き出した。その奇妙な泣き声に駭おどろいて、婦長が駆けつけてくる。朋輩ほうぱいが寄つてくる。はては医局いきょくの扉ドアが開いて医局長以下が、白い手術着をヒラつかせて、

「なんだなんだ」

「どうしたどうした」

と、泣き声のする見当に繰り出してきた。

それからの病院内の騒ぎについては、説明するまでもあるまい。なにしろ時価三万五千円のラジウムを肛門に挿んだ患者が行方不明になつたというのである。患者のことは兎に角、ラジウムはどつかそこら辺の廊下にでも落ちていまいかというので、用務員は勿論、看護婦までが総出で探ししまわつた。

「無い……」

「どうも見つかん」

「困つたわねエ。でも探すものが、あまり小さすぎるのだわ」

そのうちに廊下に大きな掲示が貼り出された。「懸賞」と赤イ

ンキで二重丸をうつた見出しが、「ラジウムを発見したる者には、金五百円也を呈上ていじょうするものなり」と、墨痕ぼつこんあざやかに認めしたたてあつた。この掲示が出て騒ぎは一段と大きくなつた。

だが結局、判らぬものは遂に判らなかつた。五百円懸賞の偉力いりょをもつてしても、ラジウムは出て来なかつた。なにしろ太さといえど鉛筆の芯しんぐらいで、長さは僅か一センチほどというのであるから、廊下に落ちれば、風に吹きとばされるであろうし、便所の中に落ちてサアと流れ出せば、なおさら判らなくなるだろうし、ことに患者の体内に入つたままですれば、患者がどこへ行つたかが判らなければ駄目だつた。

病院の一室では、責任者たちの緊急会議が開かれた。結局原因

は、ラジウムを盗むつもりでやつて来たのだろうという説が有力だつたが、婦長の如きは、患者が識らずに三十分以上もあのラジウムを肛門に入れて置くと、ラジウムのために肛門の辺へんがとりかえしのつかぬ程腐つくつて遂ついには一命いぢめいにかかるだろうなどと心配した。しかし誰が盗んでいったか、そいつばかりは誰にも判らなかつた。

——と云う事件について、今も尚みなさんは多少の記憶を持つていられないだろうか。あの「ラジウム入り患者の失踪事件」というのが、新聞に報道されたのは、もう今から五年あまり昔のことだつた。

あの事件に興味を持つて、その後の記事を楽しみになすつた方もあつたろうが、そういう方はきっと失望せられたに違ひない。

なぜなれば、あれから後、あの患者が逮捕されたという話も無ければ、用務員さんがラジウムを発見して五百円貰つたという記事も出なかつたからである。あの事件の報道は、あれつきりのことで、杳として後日物語がうち断たれてある有様だつた。

### 五年あまり後の今日――

ここに図らずも、あの「ラジウム入り患者の失<sup>しつ</sup>踪<sup>そう</sup>事件」の真相と、その後日物語を発表する機会を与えられたことを、みなさんに感謝する次第である。

さてあの時価金三万五千円也のラジウムはどうしたか。それから、あのラジウム入りの患者はどうなつたか。

患者の方については、なによりもまず安心せられたい。あの思  
いやりのある婦長さんや、新聞記者君が心配して下すつたことは、  
遂に杞憂きゆうに終つたのであるから。つまりあの患者は、ラジウムに  
生命いのちを取られることなしに、うまく助かつたのである。そして今  
もピンピンしている。ピンピンしているどころか、こうして原稿  
用紙に向つてペンを動かしているのである。

あの失踪した患者というのは、実は斯じつくいうそれがしながらであ  
る。本名を名乗つてもいい。丸田丸四郎——これが私の本名であ  
る。

こう名乗つてしまふと、まず真まつ先さきに訊きかれるだろうと思うこ  
とは、

「どうしてお前は、病院のベッドから居なくなつたのだ」ということだろう。

これについては、正直に次のように答える。「そいつは予ての順序だったのだ……」

予ての順序だったのだ。つまりラジウムを挿入そうにゅうされて、ほんのすこしだけれど、じつと寝かされるのを待つっていたのだ。医師と看護婦とは、私が寝台ベッドの上に釘づけくぎになつてゐるだらうことを信じて疑わなかつた。

「動かないで下さい。ちよつとの間ですから」

と医師は私に云つた。そして看護婦の方を向いて、「いいかネ。二十分だよ。……僕は医局にいるからネ」

「はア。——」

そして医師が向うへ行つてしまふと間もなく看護婦は私に云つた。

「動かないで下さい。ちよつとの間ですから。——」

そういうつて彼女は、林檎のような頬に、千恵藏氏のついている映画雑誌を懐<sup>なつか</sup>しくてたまらぬという風に押しあて、そして向うへバタバタと行つてしまつた。多分その千恵藏氏を残念ながら誰かに返す時間が来ていたのであろう。

そこで私は、たいへん自然に、ベッドから起き上つて脱出する機会を攫<sup>つか</sup>んだ。近所には別の青<sup>あお</sup>ン膨<sup>ぶく</sup>れの看護婦が、しきりに編物をしていたが、彼女は編物趣味の時間を楽しんでいるわけであつ

て、管轄かんかつちがいのベッドに寝ている私の立居振舞たちいふるまいについては、まったく無関心だつた。だから私は実に威風堂々と、あの部屋を脱出していつた。

私は直ぐに便所へ行つた。

鍵をしつかりおろすと、私はかねて勝手を知つたる身体の一部を指先でまさぐつた。はたしてそこには、丈夫な二本の細い紐ひもの垂れ下たさがつているのを探しあてた。

「ううーン」

と私は呼吸はかを図りながら、指先でその紐をギュツギュツと引張つた。果して手応えがあつた。やがてズルズルと出て来たのは小銃の弾丸のような細長い容器に入つたラジウムだつた。私はそれ

を白紙はくしの上に取つて、ニヤリとほほえんだ。

「叩き売つても、まず……三万両は確かだらう」

私は白紙をクルクルと丸めると、着物の袂たもとに無造作に投げこんだ。そして嬉しさにワクワクする胸をおさえて、表玄関の人込みの中を首尾よく脱出したのだつた。

こうして私の永く研究していたスポーツは、筋書どおりにうまく運んだのだつた。これで私も、末の見込みのない平事務員の足を洗つて、末は田舎へ引込むなりして悠々ゆうゆうじてき自適ひとりごの生活ができるというものと、悦びに慄えた。

「ではお前は、あのラジウムを直ぐ処分したのかネ」と訊きかれるであらう。

直ぐ処分するということは、凡そ泥棒と名のつく人間の誰でもやるであろうところの平々凡々の手だ。そして同時に拙劣な手もある。——私はそんな手は採用しなかつた。

そこで私の第二段の計画にうつった。それは、大変突飛な計画だつた。私はその足ですぐに日本橋の某百貨店へ行つた。そこの貴金属売場へゆくと、誰にも発見されるような万引をやつた。果して私は逮捕せられてしまつた。それでいいのだつた。

なぜなれば、即日から、身体の自由を失つたと云うことは、即日から、私は警察の保護をうけたことになるのだ。

常習万引の罪状はきわめて明白だつた。予審が済むと、私の身柄は直ちに近郊の刑務所に移された。やがて判決言渡

があつた。

「被告ヲ 懲<sup>ちようえき</sup> 役<sup>しょ</sup> 五年ニ処ス！」

私は晴れて刑務所の人間になつた。私は落ちつくところへ落着いて、たいへん安心したのだつた。

その頃、世間では「ラジウム入り患者の失踪事件」のことなんか、もうすっかり忘れてしまつていて。病院の方でも、もう出ないものと諦め<sup>あきら</sup>ていた。警察では、真犯人の私を、あろうことかあるまいことか、常習万引罪で刑務所に封鎖してしまつたので、いくら巷<sup>ちまた</sup>を探したつて、犯人が網<sup>あみ</sup>に懸る筈<sup>かか</sup>がなかつた。かくして例の事件は、盲<sup>もうてん</sup>点に巧みに隠<sup>いん</sup>蔽<sup>ぺい</sup>せられることとなつた。

それはそれで大変うまくいったのだが、唯一つ困ったことが出

来た。

「なんか異状はないか」

と看守が、私の独房の窓から、室内を覗きこんだ。

「はア、困っていますんで……」

「困っている？ それは何か」

「痔でござんす。痛みますんで、夜もオチオチ睡れません」

「睡れないのは、誰でも入りたてはちと睡れぬものさ。痔だなんて、つまらん芝居をするなよ」

「芝居じやありませんです。じやそこで看守さんは見て居て下さい。いま此処で股引ももひきを脱いで、御覽に入れますから」

そういうつて私は柿色の股引に手をかけた。

「ば、ば、馬鹿」と看守は慌てて呶鳴つた。「おれが見ても判らん。上申してやるから一両日待つとれツ」

ガチャーンと窓に蓋をして、看守は向うへ行つてしまつた。

私は顔を聾めながら、莫蘿だけが敷いてある寝台の上にゴロリと横になつた。

——思いかえしてみると、痔の悪くなるのも無理がなかつた。あの病院へ行つていたころ、本当に悪かつたのである。あれからこつち、汗をかくほどの活動を、それからそれへとした上に、ラジウムの隠しどころとして、あの肉ポケットを利用した時間が実に相当の量にのぼつたのだつた。その結果、患部は悪化した。いじりまわしたのが悪かつたのか、それともラジウムを長い時間、

患部に接して置いたのが悪かつたのか。

そういうえば、ハツキリ刑務所の人間となるときに、私は千番に一番のかね合い<sup>あ</sup>という冒険をしたのだつた。あのとき、私のあらゆる持ちものは、没<sup>ぼつ</sup>収<sup>しゆう</sup>され、素ツ裸<sup>すぱだか</sup>にして拋<sup>ほう</sup>り出されたのだ。それまではラジウムを、あつちのポケットからこつちのポケットへと、頻繁<sup>ひんぱん</sup>に出し入れしていた。同じところに永く入れて置くと、たとい洋服だの襯衣<sup>シャツ</sup>だのを透してでも、ラジウムの近くにある皮膚にラジウム灼<sup>や</sup>けを生<sup>しよう</sup>ずるからだ。ところが、この素ツ裸にされ、そしてやがて襟<sup>えり</sup>に番号の入つた柿<sup>かきいろ</sup>色の制服を与えられる場合になつては、最早<sup>もはや</sup>ラジウムはそのままにして置けなかつた。洋服の一部分に入れて置けばよいようなものであるが、五年も同

じところに入れて置くと、洋服の生地がボロボロになり、その隙すきまからラジウムは自然に下に転がり落ちるだらうと考えられたからだ。鉗に穴を明けて置いて、その中にラジウムを嵌めこむ方法も考えたが、ラジウムの偉力は、洋服の生地も馬蹄で作った鉗も、これをボロボロにすることは、まったく同じことだつた。——結局、柿色の制服を着る際には、どうしてもラジウムを、あの肉ポケットに入れて、うまく独房どくぼうの中へ持ち込むより外に、いい手はなかつた。

こんな風で、私の肉ポケットの疾患しつかんは、更に悪化したのだつた。ラジウムも適當なる時間を限つて患部に当てれば、吃驚びっくりするほど治癒ちゆが早いが、度を過ごすと飛んだことになるのだつた。

「おい一九九四号、出てこい」

「はア。——」

「医務室へ連れてゆくから出て来い」

「はア。——」

私はラジウムを、清掃用の箒のモジヤモジヤした中に隠して  
それから看守に連れられて外に出た。

(おオ、おオ)

と向いの一三二二号が小窓から顔を出して、私にサインを送つ  
た。彼はこの刑務所へ入つて出来た最初の友達であり先輩だつた。  
本名は五十嵐庄吉といい、罪状は掏摸<sup>すり</sup>だとのことだつ  
た。

さて私は、その日から、痔の治療をうけることになった。何かにつけ、娑婆とは段違いに惨めな所内ではあるが、医務室だけは浮世並みだつた。

「少し痛いが、辛抱しろよ」

と医務長は云つた。なるほど手術は痛くて、蚕豆のような泪がポロポロと出た。

独房へ帰つて来ても、痛くて起上れなかつた。このままで、腰が抜けてしまうのではないかと思つた。私はそのとき、簫の中へ隠してあるラジウムを思い出した。私は朝と夜との二回、ラジウムを取り出して患部にあてた。そして毎日それを繰返した。

「どうだ、吃驚するほど、早くよくなつたじやないか」

と医務長は得意の鼻をうごめかせて云つた。

「へーい」

私は感謝をしてみせたが、肚はらの中ではフフンと笑つた。医務長の腕がいいのではない。私のやつてているラジウム療法がいいのだ。——こんなわけで、痔の方は間もなく癒なおつてしまつた。

それからは、まことに単調な日が続いた。

初めのうちは、刑務所ほど平和な、そして気楽な棲家すみかはないと思つて悦よろこんでいた。しかし何から何まで単調な所内の生活に、遂に愛想あいそうをつかしてしまつた。

尤も、私達は手を束ねて遊んでいるわけではない。私達の一団は、紙風船かみふうせんを貼つてゐるのである。広い土間どまの上に、薄い板が

張つてあつて、その一隅<sup>いちぐう</sup>に、この風船作業が四組固まつて毎日  
のよう<sup>はなや</sup>に、風船を貼つてゐるのだつた。それは刑務所の中での一  
番華かな手仕事だつた。赤と青と黄、それから紫に桃色に水色に  
緑というような強烈な色彩の蠟紙<sup>ろうがみ</sup>が、あたりに散ばつていた。  
何のことはない、陽春<sup>ようしゅん</sup>四月頃の花壇<sup>かだん</sup>の中に坐つたような光景  
だつた。向うの隅で、麻糸<sup>あさ</sup>つなぎをやつてゐる囚人たちは、絶  
えず視線をチラリチラリと紙風船の作業場へ送つて、快い昂奮<sup>こうふん</sup>  
を貪るのであつた。

風船をつくるには、色とりどりの蠟紙<sup>ぜんし</sup>の全紙<sup>ぜんし</sup>を、まずそれぞれ  
の大きさに随つて、長い花びらのように切り、それを積み重ねて  
おく。それから小さいオブラー<sup>えんけい</sup>トのような円形<sup>えんけい</sup>を切り抜いて積

み重ねる。これは風船の、呼吸を吹きこむところと、その反対のお尻のところとの両方に貼る尻あて紙である。呼吸を吹きこむ方には、小さい穴を明けて置く、これだけが風船の材料であるが、それを豊富にとりそろえて置く。

紙風船の作業は、一番最初に、あの花びらのような材料の組み合わせを作る。たとえば赤と黄との二色を、一つ置きに張った風船をつくるのであると、そのような二種の花びらを揃える。それから一枚一枚、すこしづつ外して並べ、ゴム糊のはず<sup>のり</sup>を塗る。それが一役。

次へ廻ると、ゴム糊の乾かぬほどの速度で、その花びらを一つ置きに張つてゆく。すると台のない提灯ちょううちんのようなものが出来

る。これが一役で、四五人でやる。

今度はその乾いた分から取つて、半分に折り、丁度お椀の  
ような形にする。これも一役。

次は私と五十嵐庄吉とのやつている作業であるが、二人の間に、  
張型<sup>(はりがた)</sup>のフットボールの球に足をつけたようなものが置いてある。  
まず五十嵐の方が、二つに折られて来た紙風船をとつて、いきなり  
このフットボールの上にパツと被せる。すると私は、オブラー  
トに糊<sup>(のり)</sup>をつけたものを持っていて、その風船の肛門<sup>(こうもん)</sup>のようなど  
ころへ円い色紙をペタリと貼りつける。すると間髪<sup>(かんぱつ)</sup>を入れず、  
五十嵐の方が風船をフットボールから外すと、素早くお椀みたい  
なのを裏返しにして、もう一度フットボールの上に載せる、する

と反対の側の風船の肛門が出てくるから、私は小さい穴のあいている方のオブラーートをペタリと貼るのである。それで紙風船の作業は終つた。

あとは五十嵐が、出来上つた紙風船を、お椀わんを積むように、ドンドン積み重ねてゆく。すると、ときどき検査係が廻つて来て、その風船の山を向うへ搬はこんでいつてしまふ。

私と五十嵐とは、うまく呼吸いきあを合わせて、

「はツ、——」ポン。

「いやア。——」ポン。

と、まるで鼓つづみを打つてゐるよう、紙風船の肛門を貼つてゆくのであつた。——だがこんな仕事は、せいぜい一ヶ月もやれば、

いやになるものだつた。

しかし月日の経つのは早いもので、そのうちに刑務所のお正月を、とうとう五度、迎えてしまつた。やがて二月が来れば、いよいよ婆婆しゃばの人になれることがなつた。その後、あのラジウムは遂に怪あやしまれることもなく、私の独房ひとりやうの篠ほうきの中に、五年の歳月を送つたのだつた。私に新たな希望の光がだんだんと明るく燃えだした。私は暮夜ぼや、あの鉛筆の芯しんほどのラジウムを掌てのひらの上に転がしては、紅い灯のつく裏街の風景などを胸に描いていた。

ところが出獄しゆつごくも、もうあと三週間に迫つたという一月二十五のこと、私の独房に、思いがけない二人の来訪者があつた。「オイ、一九九四号、起きてるか。——」

看守の後から背広姿の二人の訪客が入つて來た。私は保糸出獄の使者だらうと直感した。

(オヤ) 私は心中で訝<sup>いぶか</sup>つた。二人の客のうちの一人は、見知り越しの医務長だった。もう一人は、日焼けのした背の高いスポーツマンのような男だつた。

「この男ですよ。入つたときは、實にひどい痔でしてナ、ところが私の例の治療法で、予期しないほど早く癒<sup>なお</sup>つてしましました」「はア、はア」

「どうか何などお話下さい。あとでこの男の患部を御覽に入れましょウ」

「いや、それには及びません。ただ、すこし話をして見たいです」

「それはどうぞ御自由に……」

その見馴れぬ紳士は、私の痔病について、いろいろと質問を発した。私はそれについて淀みなく返事をすることに勉めた。<sup>つと</sup>しかしあの病院のことだけは言わなかつた。

紳士は大した質問もせずに、医務長と共に引上げていつた。

そのあとで私はガツカリして、便器の上に蓋をして作つてある椅子の上に腰を下した。

(どうも変だナ)

紳士は一見医師としか見えぬ質問をしていつたが、どうも医師くさいところに欠けているような気がした。<sup>きず</sup>疵を持つ脛には、それがピーンと響いたのだつた。

(探偵かしら……)

にわかの不安に私の胸は戦<sup>おのの</sup>きはじめた。

(これアいかん)

私は真先に、ラジウムの処分問題を考えた。この調子では、私の肉ポケットに入れて出ることは、明かに危険であると感じた。

きっと出獄の前に、いまの二人が私の肉ポケットを点検するだろう。そのときこそ百年目に違いない。——私は至急に別なラジウムの隠し場所を考え出さねばならなかつた。

「オイ丸田」と作業場で声をかけたのは五十嵐だつた。

「昨夜は大したお客さまだつたナ」

「うん」

「あの若い方を知つて いるかネ」

「背の高い男のことだろう。——知らない」

「知らない？ はツはツはツ。馬鹿だなアお前は。あれは帆村と  
いう探偵だぜ」

「探偵？ やつぱりそうか」

「どうだ思い当ることがあろうがナ」

「うん。——いいや、無い」

「う、嘘をつけ。おれが力になつてやる。手前<sup>てめえ</sup>の仕事のうちで、

まだ警察に知れていないのがあるネ」

「いいや、何にも無い！」

私はいつになく、この無二の親友の好意を斥けたのだつた。い  
しりぞ

くら五ヶ年の親友だつて、こればかりは打ち明けかねるというも  
のだ。

それから私たちは、無言の裡に仕事をやつた。それは私たちに  
とつて珍らしいことだつた。二人はこの仕事の間に、たとえ話が  
ないにしろ、軽い憎れ口や懸声などをかけて仕事をするのが例  
だつたから。

黙つているお蔭で、遂に私は素晴らしいことを発見した。それ  
はあのラジウムを、安全に獄外へ搬びだす工夫だつた。まず大丈  
夫うまく行くと思われる一つの思い付きだつた。

その日、昼食が済んで、囚人たちは一旦各自の監房へ入れ  
られ、暫くの休息を与えられた。やがて鐘の音と共に、またゾロ

ゾロと列を組んで、作業場に入つていった。そのとき私は、あのラジウムを裸のままで持ち出した。それは柿色の制服の、腰のところにある縫い目に入れて置いた。

作業場へ入ると、私は一同に準備を命じた。私は組長だつたら、作業の初めにあたつて、一同の面倒を見てやるため、あつちへいつたり、こつちへ来たりすることが許されていた。

「オイ、材料を見せろ」

と私は瘦せギスの青年に云つた。

「へえ、これだけ出来ています」

私はその紙風船の花びらの束を解いて、パラバラと引繰りかえしていたが、

「おい、一枚足りないぞ」

「え？」

「ナニ、いいよいよ」と私は云いながら、隅ツコに駄目な花びらが乱雑にまるめてあるところへ寄つた。そして中から、一枚の柿色の花びらを取つた。「こいつを入れとこう」

「それは駄目です」

柿色の花びらというのは、実は不合格にすべきものだつた。それは蠟紙(ろうがみ)の黄の上に、間違つて桃色が二重(じゅう)刷(すり)になつたものだつた。これは二色が重なつて、柿色という思いもかけぬ色紙になつた。元来すこし位、色が変わつても、子供の玩具(おもちゃ)のことだからいいことになつてゐるのだが、柿色という色は囚人の制服と

同じ色であるところから、われわれ囚人の方で厭がつてハネることにしているのであつた、それは看守も大目に見ていたのだつた。  
 「なアに、一枚だけだ。これでいいよ。あとは捨てろ。この屑くずや<sup>ま</sup>山を直ぐ捨てて来い」

そういうなり私は、柿色の花びらを一枚束の中に加えた。一枚ぐらい余分に加わつても別に作業に不都合はなかつた。

それが済むと、私は自分の作業台のところへ帰つて來た。そこには五十嵐が何喰わぬ顔で待つていた。

作業は始まつた。

私は柿色の花びらのついた紙風船が、もう来るか来るかと、首を長くして待つた。

(あ、来たぞ) 柿色の紙風船は、遂に私たちの方に廻つて來た。  
五十嵐は無造作に二つに折つて、バサリと球たまの上に被せた。

「やあ」 ポーン。

と私は丸い風船の尻あてを貼りつけた。だがそこに千番に一番  
のかねあい……というほどでもないが、糊のついたところに例の  
裸のラジウムをくっつけるが早いか、その方を下にしてポーンと  
柿色の紙風船に貼りつけたのであつた、つまり鉛筆の芯しんの折れほ  
どのラジウムは、紙風船の花びらと尻あてとの紙の間に巧みに貼  
り込まれてしまつたのだつた。

「いやア。——」 ポン。

五十嵐は同じ調子で、そのラジウム入りの風船をひつくりかえ

した。私はチラリと彼の顔を見たが、彼は口をだらしなく開いて、眼は睡むそうに半開になつていていた。彼は私の大それた計画に爪ほども気がついていならしかつた。私は大安心をして、ポーンと丸い色紙を貼りつけたのだった。五十嵐はその柿色の紙風船に見向きもせず、腕をサッと横に伸ばして今まで出来た紙風船の上に積みかさねた。そこへお誂え向あつらきに検査係が来て、その一と山の紙風船を向うへ持つていつた。私はうまくいつたと心中躍りあがらんばかりに喜び、ホッと溜息をもらした。

こうしてラジウムは、柿色の紙風船の中に入つたまま、私の手を離れていったのだつた。

それから後の話は別にするほどのこともない。私は予定より二

週間ばかり早く、刑務所を出された。出るときは、はた果してあの帆村とかいう探偵立合いの下に、肉ポケットの中を入念に調べられたが、それは彼等を失望させるに役立つたばかりだつた。私が出したあとで、私の囚人服や独房内が、大勢の看守の手で大騒ぎをして取調べられていることだろうと思つて、噴き出だしたくなつた。

娑婆の風は実にいいものだつた。ピューツと空からツ風が吹いて来ると、オーヴァーの襟えりを深ふかぶか々と立てた。

「ああ、寒い」

風が寒いのを感じるなんて、何という幸福なことだろう。私は五年間に貰いためた労ろうえき役の賃金の入つた状袋じょうぶくろをしつかりと

握りながら、物珍ものめずらしげに、四辻あたりを見廻したのだつた。

そこへ一台の円タクが来た。呼びとめて、車を浅草へ走らせる。  
円タクに乗るのも、あれ以来だつた。私は手を内うちぶ懐ところへ入れて、  
状袋じょうぶくろの中から五十銭玉を裸のまま取り出した。

「旦那、浅草はどこです」

「あ、浅草の、そうだ浅草橋の近所でいいよ」

「浅草橋ならすこし行き過ぎましたよ」

「いや、近くならばどこでもいい。降おろして呉れ」

私は綺麗な鋪道ほどどうの上に下りた。だが何となく刑務所の仕事場を  
思い出させるようなコンクリートの路面だつた。私は厭いやな気がし  
た。

そこで私は、トコトコ歩き出した。

訪ねる先は、七軒町の玩具問屋、丸福商店だつた。

あつちへ行つたり、こつちへ行つたり、相当まごついたが、やつと思う店を探しあてた。店頭には賑かに廻や羽根がぶら下り、セルロイドのラッパだの、サーベルだの、紙で拵えた鉄兜だの、それからそれへと、さまざまなもののが所も狭く、天井から下つていた。——私は臆面もなく、店先へ腰を下した。

「いらっしゃいまし。何、あげます?」

と小僧さんが尋ねた。

「ああ、紙風船が欲しいのですがネ、すこし注文があるので、いろいろ見せて下さい」

「よろしゅうございます。——紙風船といいますと、こんなところで……」

と小僧さんは指さした。なんのことだ、私の坐った膝の前、あの懐しい紙風船が山と積まれているのだ。

(おお。——)

私の胸は早鐘のように鳴りだした。風船を両手でかき集め、しつかり<sup>おさ</sup>压えたい衝動に駆られた。だが私も、刑務所生活をして、いやにキヨトキヨトして来たものである。

「そうですネ。——」

と私は無理に気を落ち着けて、風船の山を上から下へと調べていった。

(柿色の風船は?)

無い、無い。無いことはないのだが……。およそ私の居た刑務所の紙風船は、一つのこらすこの丸福商店に買われることになつてゐるのだ。それは刑務所で入札にゆうさつの結果、本年も紙風船は丸福に落ちていたのだつた。だから柿色の紙風船は、この店にあるより外に、行く先がなかつた。売れたのかしら?

「……もう風船はないのですか」

「唯ただいま今、これだけで……」

「そうですか。どこかにしまつてあるんじゃないですか」

「いいえ」

小僧さんは悲しいことを云つた。

私はガツカリして、立ち上る元気もなかつた。そのとき奥から番頭らしいのが、声をかけた。

「吉松。さつき、あすこから来たのがあるじやないか。あれを御覧に入れなさい」

「ああ、そうでしたネ。……少々お待ち下さい。今日入つた分がございましたから」

「今日入つたのですか。ああ、そうですか」

私は悦びに飴のように崩れてくる顔の形を、どうすることも出来なかつた。小僧さんは、大きいハトロン紙の包みをベリベリと剥いた。

「これは如何いかがさまで……」

「ああ——。」

私は一と目で、柿色の紙風船が重なつてゐるところを見付けた。

「あ、こいつはお逃げ向あつらむきだ。こいつを買いましよう。」

私は十円紙幣さつぱいを抛り出して、沢山の風船を買つた。小僧さんが包んでくれる間も、誰かが邪魔じやまにやつて来ないかと、気が気じやなかつた。だがそれは杞憂きゆうにすぎなかつた。

私は風船の入つた包みをぶら下げて、店を出た。ところが店の前を五六間行くか行かないところで、私はギョツとした。私の顔見知りの男が、向うから歩いて來るのである。それは帆村という探偵に違ひなかつた。

(これは——)と咄嗟とつさに私は決心を固めたが、幸いにも帆村探偵

は、並び並んだ玩具問屋の看板にばかり気をとられて歩いているらしかった。私はスルリと電柱の蔭に隠れて、とうとうこの間抜け探偵をやりすごした。

私はすぐに円タクを雇うと、両国へ走らせた。りょうごく国技館前で降りて、横丁に入つてゆくと、幸楽館こうらくかんという円宿えんしゆくホテルがあつた。私はその扉ドアを押した。

三階へ上り、部屋からお手伝いさんを追い出すのももどかしかつた。宿泊料とチップを受けとつて、ふくら雀すずめのようなお手伝いさんが出てゆくと、私は外套がいとうを脱ぎ、上衣うわぎを脱いだ。そして持ってきた包みをベリベリと剥がした。ナイフなんか使う遑いとまがない。すべて爪の先で破つた。

出て来た出て來た。

「柿色の紙風船だア！」

外ほかの紙風船は、室内にカーニヴァルの花吹雪はなふぶきのように散つた。

「これだ、これだッ」

とうとう探しめてた柿色の紙風船だつた。私の眼は感きわまつて、俄かに曇つた。その泪なみだを襯衣シャツの袖で横なぐりにこすりながら、私は紙風船の丸い尻あてのところを指先で探つた。

「オヤ？」

どうしたのだろう。尻あてのところに確かに手に触れなければならぬ硬いものが、どうしても触れないのだ。そこはスケートリンクのようだ平坦だつた。

「そんな筈はない！」

悦えきれなくなつた私は、尻あてに指先をかけると、ベリベリと引つペがした。すつかり裏をかえして調べてみた。ところが、やつぱり何も見当らない。これは尻あてと、呼吸<sup>いき</sup>を吹きこむ口紙の方と間違つたかなと思つて、今度はそつちの方をひき<sup>むし</sup>つてみた。が、やつぱり無い。そんな筈はない。そんな筈はない。が、どうしても見当らないのだつた。

「ああーツ」

私の腰はヘナヘナと床の上に崩れてしまつた。夢ならば醒<sup>さ</sup>めよと思つた。神様、もう冗談はよしましようと叫んだ。時間よ、紙風船を破く前に帰れよと喚<sup>わめ</sup>きたてた。だが、そんなことが何の役

に立つというのだ。絶望、絶望、大絶望だつた。数万の毛穴から、身体中のエネルギーが水蒸気のように放散ほうさんしてしまつた。私は脱ぎ捨てられた着物のようになつて、いつまでも床の上に倒たおれていた。

それはどれほど後だつたかしらぬ。私はようやく気がついて、床の上に起き直つた。

考えてみると、随分馬鹿な話だつた。あれほどうまく隠しあおせた三万五千円のラジウムが、とうとう行方不明になつてしまつたのだ。だが、あの日までは私の手のうちにあつたラジウムである。現在も地球上の、どつかに存在している筈はずであつた。

そう思うと又口惜しなみだ涙がポロポロ流れ落ちて來るのだつた。人生の名譽を賭けたあのラジウムを、そんなに簡単に失つてなるものかと歯ぎしり噛んだ。

「一体どこで失つたんだろう?」

私はあの日からのちのことを行ひいろいと綴つて見た。いろいろと考えられはしたが、結局しつかりしたことは判らない。しかし一旦糊<sup>(のり)</sup>で紙の間に入れたラジウムが、こんな短期に脱げ落ちるのはおかしい。といつて風船が違つたわけでもない。この柿色の風船のように、半端な色花びらを接ぎ合<sup>つあ</sup>わせたものは外<sup>ほか</sup>にない筈だ。

私は同じことを、いくたびも繰り返し繰り返し考え直した。考

え直しているうちに、ふと気がついたことがあつた！

「おお、あれかも知れない」

私はムクリと起き上つた。

「いや、あれに違いないぞ。うん、そうだ」

私の全身には、俄かに血潮の流れが早くなつた。<sup>にわ</sup>手足がビリビ  
リと慄えてきた。<sup>ふる</sup>

「よオし、畜生……」

私は戸外<sup>こがい</sup>の暗闇に走り出でた。

さてそれから後のこと、どう皆さんに伝えたらいいだろうか。  
私はすこし語りつかれたので、結末を簡単に述べようと思う。そ

の結末というのは、恐らく、もう皆さんの中にハツキリと映つて  
いることと思う。そういうつて判らなければ、もつと明瞭に云  
おう。

皆さんは、二月二十日付の朝刊を見られたであろうと思う。そ  
の社会面の中で、なにが皆さんを最も駭かしたであろうか。

それは云うまでもあるまい。

「山麓の荒小屋に発見されたる怪屍体」という見出しで、「昨  
十九日午前八時、×大学生××は××山麓の荒れ小屋の中に於て  
休息せんとしたところ、図らずもその中に年齢四十二三歳と推定  
される男の素裸の怪屍体を発見した。警報をうけて警視庁の大  
江山検査課長以下は、鑑識課員を伴つて現場に急行した。

現場には同人のものらしき和服と二重まわしが脱ぎ捨てられてあつたが、その外に何のため使用したか長い麻縄あさなわが遺棄いきされがあつた。其の他に持ちものはない。屍体は即日解剖に附せられたが、この男の死因は主として飢餓によるものと判明した。尚屍体の特徴として、左肋骨ろうこつの下に、著しい潰瘍かいようの存することを発見した。しかしその成因せいいん其他いんそなたについては未詳みしようであるが、とにかく兎行に関係のある重大なる謎として係官の注意を集めている。

後報。——被害者の身許が判明した。彼は五十嵐庄吉（三九）であつた。十日前に××刑務所を出獄した掏摸十二犯の悪漢である。彼は刑務所を出で、正門前に待ち合わせていた自動車に乗つたまま行方不明となつたもので、同人の家族から××署へ捜索そうさく

願が出ていたものである。犯人はいまだ不明であるが、多分同人を恨んでいた者の復仇らしい見込みである。警視庁では同人を連れ去つた自動車と運転手を極力厳密探中である云々五十嵐庄吉が惨殺され、しかも左肋骨の下に不可解の潰瘍の存することについて、皆さんは心当たりがないであろうか。

あいつは掏摸の名人だつた。私はそれをつい永い間忘れていた。いや私はもつと忘れていたことがあつたのだ。刑務所は学校と同じことに、立派な人間ばかりいて、立派な友情があふ溢れるほど存在しているものだとばかり誤解していたことだ。

私が風船にラジウムを入れたとき、五十嵐の奴はそれを裏返したが、そのとき遅く彼のとき早しで、彼は、小器用に指先を使つ

て、ラジウムを掏りとつたに違ひなかつた。

そのことについて今になつて気がついた私は、刑務所の門前で運転手に化けると、刑務所の門前で出獄したばかりの彼をうまうまと誘拐ゆうかいしたのだつた。そしてあの荒れ小屋に連れこむと、身の自由を奪つていろいろと折檻せつかんしたが、強情こうじょうな彼奴は、どうしても白状しなかつた。私は怒りのあまり、遂に最後の手段を採んだ。彼の身体をグルグルと麻縄あさなわで縛りあげると、ゴロリと床の上に転がした。そのまま幾日も抛つて置いた。無論一滴の水も与えはしなかつた。だから彼は遂に飢餓ついきがと寒さのために死んでしまつたのだつた。

私は彼の身体の冷くなるのを待つて縄を解いた。そして素裸に

すると全身を改めた。そのときあの左肋骨下の潰瘍を発見したのだつた。

「そうちら見ろ。貴様がラジウムの在所を喋らずとも、貴様の身体がハツキリ喋つているではないか。ざまあ見やがれ」

私は早速彼の左のポケットの底を探つて、とうとう目的のラジウムを引張り出したのだつた。無論彼が白状せずともこのラジウムの力で、彼の身体の上に遠からずして潰瘍が現われるだろうことを私は初手から勘定に入れていたのだつた。

だが私も詰らんことから人殺しをしてしまつた。今は後悔している。あのラジウムは、未だにそのまま持つてゐる。それを金に換えるためと、そして私の新しい世界を求めるため、今夜私は日

本を去ろうとしている。多分永遠に日本には帰つて来ないだろう。私はあれを金に換えた上で、赤い太陽の下に、花畠でも作つて、あとの半生をノンビリと暮らすつもりである。

# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 傳囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1934（昭和9）年2月号

入力:tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 柿色の紙風船

## 海野十三

2020年 7月12日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>